

平城宮東院地区の調査 平城第421次)

平城宮にはほぼ正方形をした宮域の主体部分の東側に張り出し部分が設けられており、この部分の南半を東院地区と呼んでいます。東院地区は皇太子の居所である東宮があったと推定できるほか、『続日本紀』などの歴史書の記述によれば、叙位などの儀式や宴会などに頻繁に利用されていたことが知られています。また神護景雲元年(767)の竣工と記される「東院玉殿」や宝亀年間(770～780)の記録にみえる「楊梅宮」は東院地区にあったと考えられています。

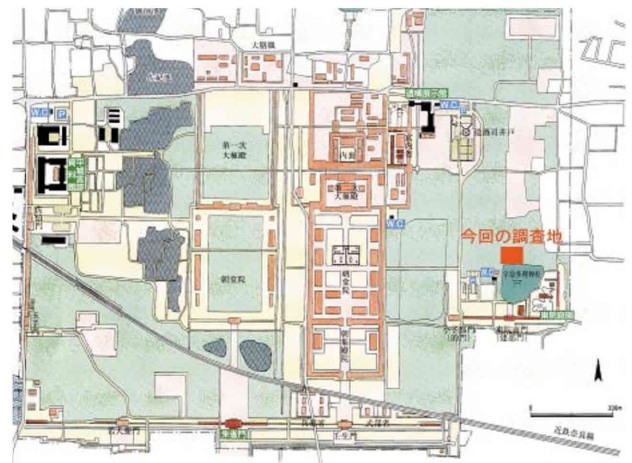
東院地区ではこれまで南辺部および西辺部を中心に発掘調査を実施しており、復原整備された庭園(東院庭園)の他、多くの掘立柱建物が高い密度で建ち並び、かつ何度も建て替えられていた様子が確認されています。しかし「東院玉殿」に相当するような東院の中枢を成す建物の遺構は現在までのところ確認されておらず、東院地区の性格をさらに探求していく上では、中枢部分の解明が不可欠な課題として残されてきました。

そのような観点から、今回は東院地区の南北中軸線上に東西約50m、南北約30mの約1500㎡の調査区を設定し、4月から調査を実施しています。この部分は東院地区の中でも地形が尾根状に高まっていることから中枢施設の存在が期待されています。

今回の調査でも、これまでの東院地区の調査と同様に柱穴を高い密度で検出しており、数多くの掘立



検出中の柱穴群(北から)



平城第421次調査区の位置

柱建物や塀が建てられていた様子がうかがえますが、中枢施設に推定し得る性格の建物遺構は現在のところ確認できていません。今回の調査区では地表面の舗装や建物の周囲に掘られる雨落溝がまったく残存していないことから、後世の耕地化によって奈良時代の地面はかなり削平されているとみられます。したがって礎石建物と考えられる「東院玉殿」など中枢施設の遺構が完全に削平されている可能性は否定できませんが、「東院玉殿」に葺かれたという「瑠璃瓦」(緑釉瓦)など、中枢施設の存在を示す手がかりとなるような遺物も今のところ出土していません。

調査期間は9月末までの6か月間で計画しており、ひとつひとつの遺構について詳しい調査を進めていきながら、それぞれの建物やこの調査区域の性格を明らかにしていく予定です。9月1日には現地説明会を開催し、約750人の参加者に調査成果をお伝えすることができました。

(都城発掘調査部 金井 健)



瓦片が捨て込まれた柱の抜取穴